

# 柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌  
 住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1  
 柿生中学校内  
 電話：070-1503-6401/044-988-0004  
<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>  
 第164号

令和4年1月



新年あけましておめでとうございます  
 本年もよろしくお願いたします

柿生郷土史料館 館長  
 柿生中学校 校長 田中眞砂美

令和4年を迎え、皆様におかれましては、良い年をお迎えのことと存じます。

昨年も、新型コロナウイルスの感染拡大に翻弄された年になりました。緊急事態宣言の延長の中、柿生郷土史料館も閉館を余儀なくされたことが続き、いつになったら開館できるのか、心配な日々が続きました。

しかし、緊急事態宣言が解除された10月からこれまで準備していただいた特別企画展「写真で見るふるさとの原風景」を多くの方にご覧いただけるようになりました。穏やかな秋の日差しとともにほっと一息ついたことが思い出されます。

本年は、干支でいえば、「壬寅」(みずのえとら)の年で、厳しい冬を越えて芽吹き始め、新しい成長の礎となるイメージがあるそうです。新型コロナウイルスの感染拡大によって、社会の様子は大きく変わりました。マスクをしての生活が通常となり、外出を控え、人と人との接触を控えることも当たり前になっています。しかし、科学の進歩やそれを支える献身的な人々の努力により、困難な状況を克服し、当初の状況に比べ、よい状況になってきていることも事実です。この世界的な困難を乗り越えた先には、人々が様々な形でつながりあう豊かな社会が生まれてくるのではないかと期待しています。

柿生郷土史料館にとっては、本年が開館12年目にあたります。一回りの記念の年ともいえるのではないのでしょうか。本年も、地域の皆様と共に、歴史と文化に学びながら、着々と歩んでまいりたいと存じます。本年も、皆様のご活躍をお祈りするとともに、素晴らしい年となりますよう、お祈り申し上げます。



かわさきの  
郷土史を読む 4

## 小塚光治著『川崎史話』(その2)

川崎市教育委員会事務局文化財課学芸員 新井 悟

### 通史としての『川崎史話』

小塚氏の『川崎史話』の特色は、原始から明治時代の初期までを通史の形式でまとめていることにあります。前回も書きましたが、郷土史家が個人でまとめた通史としては、ほかに山田蔵太郎著『川崎誌考』(1927)、村上直編著『わが町の歴史・川崎』(1981)があるのみです。『川崎史話』は、1961(昭和36)年に上巻、1964(昭和39)年に中巻、1966(昭和41)年に下巻が刊行され、その後1970(昭和45)年に3冊本のエッセンスをダイジェストにした『やさしい川崎の歴史』が出版されるとともに、1987(昭和62)年に1冊本にまとめられました。

この3冊本『川崎史話』からその構成を見てみましょう。日本史の時代区分にしたがって、「その時代の川崎は、」という内容です。縄文時代は「子母口貝塚ができた時代」、弥生時代は「日吉台の堅穴ができた時代」、古墳時代は「加瀬古墳群がつけられた時代」、奈良時代は「野川の影向寺が栄えた時代」、平安時代は「小高駅が栄えた時代」、鎌倉時代は「小沢城が栄えた時代」、室町時代は「修廣禅寺が栄えた時代」、戦国時代は「泉沢寺の市場が栄えた時代」となっていて、市域の代表的な遺跡、寺院、旧跡をひくことで、その場所の特性が引き立つように工夫されています。

(以下4頁へ続く)

大地に刻まれた  
歴史探勝 1

縄文海進と県史跡・子母口貝塚

村田 文夫(日本考古学協会会員)

地域の歴史の掘り起こしは、古文書類等からの謎解きがよく知られていますが、大地に眠る遺跡資料からも楽しめます。それを何回かに分けてやさしくご案内します。

縄文海進の謎解きに挑戦

まずは「縄文海進」とは一。古生物学者の松島義章先生は、学校教育では「大化改新」は教えるが、「縄文海進」は教えないとぼやいて、講座受講生の笑いを誘っていました。

「縄文海進」とは、縄文時代に気温が温暖化して、南極・北極などの氷河が溶けて海水面が上昇、その海水が人々の生活している陸地に押し寄せた状態のこと。その確たる証拠が、昭和61年に川崎駅前地下街アゼリアの工事中に発見されました。

ブルドーザーで削った壁面から日頃食べたことがないウラカガミ・イヨスダレなどの貝類が多量に発見され、それら貝類と発見された地層を根拠に分析すると、今から1万3000年前(縄文草創期)の海面は、現海面より-43mも低かった。その後、地球的規模の温暖化で海面は急上昇し、7600年前(縄文早期末)になると、現在の海面と同じ水位に。6300年前(縄文前期中頃)になると、海進は最も進んで、現在の海面よりも+4m前後も上位になりました。行き場をなくした「海水」は、陸地に押し寄せ、次々に海面下に一。だが、この驚異の「海進」も縄文前期まで。以後、縄文中期からは一転して「海退」期に入りました。第1図は、海進・海退関係を1枚の図で表したものです。

では、もっとも「海進」が進んだ6300年前(縄文前期中頃)には、川崎市域のどの辺りまで、海水が進んだのでしょうか。現在の研究では、高津区千年と中原区等々力を結んだ辺りまでと復元されています。したがって、川崎区・幸区・中原区は、各種の魚群が遊泳する海面下でありました。

県史跡・子母口貝塚などの発掘からわかること

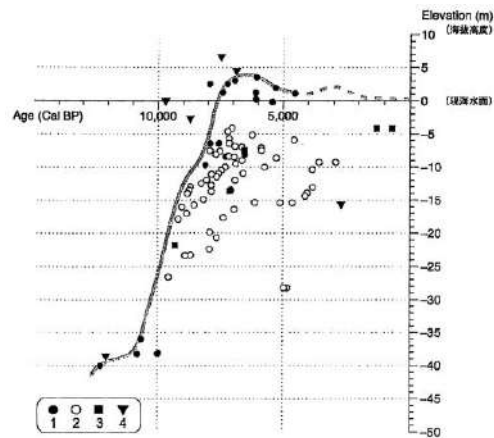
ここまでの自然の営みに、縄文人はどのように対応したのでしょうか。結論はじつに賢い縄文人でした。高津区の台地先端部からは、県史跡・子母口貝塚などの縄文時代早期末～前期前半の貝塚が幾つも発掘されています。崖上から海が見渡せる環境ですから、小舟を漕いで魚類を釣り、浜辺では貝類を漁り、ムラに近寄ってくるシカやイノシシなどは猟犬を使って集団で捕まえ食糧としました。四季にあわせて実るクリ・クルミなどは、最上のメジャー・フードでした。彼らは植物が持つアクを抜き去る技術も経験的に体得しておりました。

縄文人が食糧としていた各種の残滓が堆積した場所が、遺跡の一種である【貝塚】で、考古学者はそこを発掘調査し、食糧残滓から彼らの食卓風景を復元します。

その実相をもう少し詳しく見ましょう。まず果敢な漁撈民の一面。新作貝塚からは、第2図Aのように硬い鹿角を加工した釣針が発掘されています。軸部先端に溝をめぐらす。これは釣糸が縛りやすくするためでしょう。舟を漕いでマダイ・クロダイ・ヒラメ・マグロなどを釣り上げました。一方、同じ時期の貝塚からは、アジ・イワシなどの小型魚ほか、菊名貝塚(東急線・菊名駅近くの貝塚)からは、ウナギの脊椎骨も発掘されています。思わず、縄文人もグルメですなあと言いたくなる。

しかし、前期前半まで栄えた漁撈文化も、後半期には衰微します。その証拠に、採取した貝類も鹹水(海水を多く含む水)産のハマグリなどは減少し、淡水・汽水が混合したヤマトシジミなどが主体になりました。これは縄文中期に向けて「海退」し、水域環境が変化したからです。

現在の川崎港一。明治時代以降の砂浜海岸の埋め立て工事や、首都高速道路にあわせて人工の直線的な海岸線になっています。それ以前は、何万・何千年にわたって継承されてきた、広くて遠浅な砂浜景観でした。現在、その海岸景観を偲ぶ縁はまったく消えてしまいました。



第1図 多摩川・鶴見川下流域における約1,3000年前以降の相対的海面変化曲線



A: 釣針(鹿角) B: 貝輪(アカガイ) C: 耳飾り(硬玉)  
第2図 新作貝塚の出土品三種

シリーズ

教育の歩み 第3部

# 日本の学校と教育(20)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

## 庶民教育とエリート教育

戦前の中学校がエリート教育の場であったことは、日米戦争の開始後、敵性語として国民に英語の使用が禁じられた時期に、中学校では堂々と英語の授業が行われていた事実から明らかになります。昭和18(1943)年の教育課程の改訂で、英語の授業は週7時間から4時間に縮小されましたが、それでも1年生から当時の最上級生の4年生(昭和18年から戦時中を理由に中学校の課程は1年短縮され、4年制になったのです)まで授業が組まれていたのです。右図はこの年18年の7月に発行された「英文法と英作文」の教科書の中表紙と奥付です。中学生はエリートの卵なのだから、敵性語である英語も使いこなせるようになってほしいというわけです。英語の使用を禁じられた野球などは、ストライク・ボール・アウト・セーフなどが使えず、随分と表現に困ったことが伝えられているだけに、落差の大きさは実感していただけたと思います。

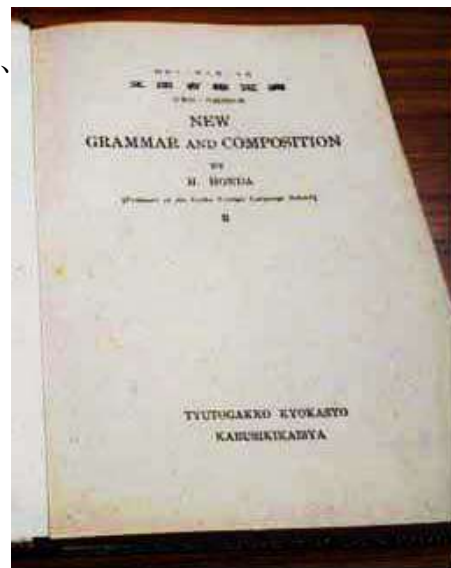
高等学校の歴史の時間では、昭和10年代半ばに発禁処分を受ける津田左右吉博士の『古事記・日本書紀の研究』や『日本上代史の研究』などを用いて、実在の天皇は第10代崇神天皇が最初で、神武天皇から第9代の開花天皇までは実在しない架空の人物であることなどを、教えられていたのです。人の上に立つものは真実を知っておく必要がある。しかしその事実は庶民に漏らしてはならない。天皇の政府は国民に信頼される政府であり続けることが大切だからです。こうして「寄らしむべし、知らしむべからず」の精神が次第に若者を捉えていったのです。皇国史観が軍部と結託してアカデミズムの世界を一時的に支配したのは、実質的に軍部が政治の実権を握っていた昭和10年代の10年足らずの期間だったのです。

## 初等教育の定着

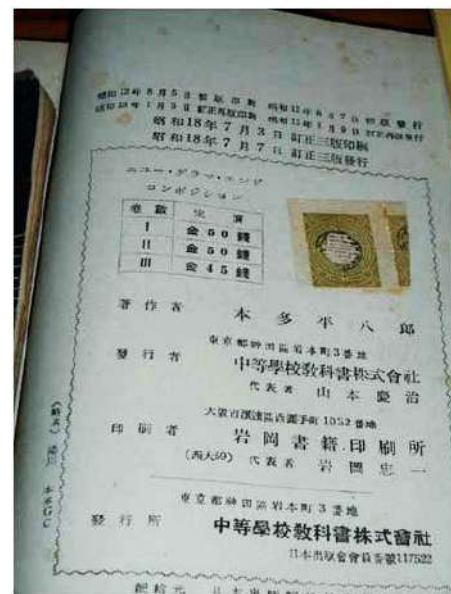
話を初等教育に戻します。ここまで記してきたように明治20年代半ば以降、特に明治27~28(1894~95)年の日清戦争以降、尋常小学校の就学率は大きく上昇します。この動きは、明治30(1897)年に義務教育段階の授業料が無償となったことでさらに上がり、男児については100%に近くなり、女兒についても70%を超え、その後も年を追って上昇していきました。明治25年以降の10年間に、初等教育の就学率は驚異的なスピードで上昇したのです。その結果、尋常小学校の教室編成に、いくつかの変化がみられるようになります。

今までは、試験に合格した児童のみが進級を許されましたから、当然学級編成は習熟度別(当時は等級別と呼んでいました)に編成されており、学級を構成する児童の年齢もマチマチだったのです。こうした編成が30年代に入ると大きく変化します。

まず、年齢別の学級編成への移行が観察されるのです。児童数の少ない学校では、なお1,2年生と3,4年生といった合級制がとられていましたが、それでも教室ごとに1人の正教員が就く担任制の始まりが確認されるのです。学校では、そして学級の内部では、地主や名望家の子であろうと貧しい家庭の子であろうと、成績評定の上では基本的には一緒に扱われます。まずは出自も生活習慣も雑多である子ども達を、集団行動が出来る子ども達に仕立てる必要がありました。明治20年代の日本は殖産興業政策の成果もあって、念願の産業革命の開始期に差し掛かっていたのです。この段階では、未だ分業体制は社会的に定着する段階にまで広まっていなかったのです。しかし産業革命の進展は、社会的分業の急速な発達を求めます。そこでは規律に従った一糸乱れぬ統一行動が必要とされました。同じことは上意下達型の組織である軍隊でも同じでした。学校は1人の担当教員が一定数の子ども達を1人で指導し監督する組織です。それゆえ、規律と訓練に関する特別の取組が必要とされたのです。国民を広く規律化するには、先ずもって子どもの時期に規律的行動に慣れさせるのが、最も効率的で効果も高いと考えられたのです。(続く)



中学2年生用「英文法と英作文」の教科書中表紙



昭和18年7月発行の中学校用「英文法と英作文」の教科書奥付

(1頁から続く)

さらにひとつひとつの内容をみると、たとえば現在の麻生区片平2丁目に所在する「修廣禅寺が栄えた時代」では、「実力の世」の各節が「分倍河原の戦い／鎌倉道／渡田の新田神社／実力の世／戦略上からみた多摩丘陵／分銭と棟別銭／土一揆／禅寺の栄え／板碑／この地の豪族」となっています。時代背景とその時代の特徴がはっきりとあらわれた市域の名所旧跡が紹介されているので、「この場所は、あの時代の、そういう動向があった」ところなのだ、すんなりと理解できるようになっています。題材の取り方、説明の仕方、どれをとっても見事というほかありません。ちなみに、この章では修廣寺の写真が2枚のせられ、山門の写真に添えられた解説には「片平の修廣寺山門 この頃は足利氏の保護によって、この地の各地に禅寺が建ち栄えました。修廣寺はもと村内の寺台にありましたが、いつの頃か現地に移り、開山の玄秀は永正17年(1520年)に入寂したといえます。丘の中腹にある寺全体が中世の豪族の屋敷を思わせます。」とあります。昭和30年代の印刷物の写真なので鮮明ではありませんが雰囲気を感じられるもので、これにあわせて、短文ながら時代背景、寺の移転、開山のこと、寺の立地などがよく分かる解説をよむと、現地を訪ねたい気持ちが湧きおこるようです。

室町時代までは各時代に1章があてられています。資料が豊富にのこる江戸時代には4章分がさかれ、記述が濃密になっていきます。それこそ、現在の川崎区から麻生区でおきた主な事柄が一読でわかるようになっています。こうした文章を読むと、自分たちの住んでいる地域の過去の歴史が具体的にわかり、まさに来し方行く末を考えさせられます。

前回ご紹介した1964(昭和39)年に表明された小塚氏の視点をいま一度ひいておきます。「真に川崎市(神奈川県)を発展させるためには、その風土、文化的遺産、歴史的伝統を大切に、それに根を下ろした精神を基にし、その上に創造的で科学性ゆたかな考え方と計画が必要だと思います。これは私が歴史を学び、教えられてきたところでもあるわけです。多摩丘陵も多摩川沖積地も日に日に変貌する今日、川崎市民(神奈川県民)の皆さんに正しく土地の歴史を知ってもらい、郷土の文化と伝統を守り、市・県を愛する精神を持っていただきたいと心から願うものです。」と。先人の教えに耳を傾ける。地域の未来を考えるために、地域の歴史を知る。この方針は今の時代にも有効なのではないでしょうか。

ご興味がある方のために、川崎市立図書館の蔵書を紹介します。『川崎史話』は、上・中・下の3冊本も、のちにまとめられた1冊本も各図書館に所蔵されています(2021(令和3)年10月末時点)。貸出禁止になっているものもありますが、貸し出せるものもあります。なお小塚氏には、『やさしい川崎の歴史』(1970、教育出版)という本もあり、これも川崎市立図書館に所蔵されています。

#### 参考文献

- 小塚光治 1961『川崎史話』上巻／1964『川崎史話』中巻／1966『川崎史話』下巻 多摩史談会  
 小塚光治 1970『やさしい川崎の歴史』教育出版  
 小塚光治 1987『川崎史話』桐光学園教育研究所  
 村上直 1981『わが町の歴史・川崎』文一総合出版  
 山田蔵太郎 1927『川崎誌考』石井文庫

## 柿生郷土史料館催物案内【参加自由、入場無料】

◎開館日: 奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

**1月** 9・16・23・30日(毎日曜日) **2月** 12・19・26日(毎土曜日)

◎開館時間: 午前10時～午後3時(緊急事態宣言、蔓延防止等重点措置宣言下では休館です)

### 第19回 特別企画展

## 写真で見るふるさとの原風景

戦後における村々の変貌の過程や、各地の開発の様子など、柿生地区村々の変遷の様子をお楽しみください。緊急事態宣言等が再発された場合、宣言解除まで再休館・再日程となります。

**期間** 10月2日(土)～1月30日(日) **会場** 柿生郷土史料館特別展示室

### 【カルチャーセミナーの再開に関するお知らせ】

コロナ禍の為、長らく休止しておりましたが、状況を見極めながら3月からの再開を検討中です。詳細は2月1日発行の2月号でお知らせします。